

学業における成功・失敗経験の評価の規定因

上野淳子・尾崎仁美

(平成19年9月25日受理 最終原稿平成19年12月5日受理)

本研究では、過去の学業における達成経験の評価の規定因を検討した。大学生475名を対象とし、自由記述で過去の達成経験を、学業領域の目標を表出した311名を抽出した。その経験が自分の現在や未来に及ぼす影響の評価を検討したところ、成功した場合にはほとんどの者がプラス評価していたが、一部そうでない者もいた。また、失敗の場合の評価はプラス評価・マイナス評価・どちらの判断もしかねる者に等分されていた。評価の規定因として目標の属性と原因帰属のパス解析を行ったところ、成功条件では周囲にとっての重要性和努力帰属が現在・未来への評価を高めていた。しかし、属性と帰属は失敗条件の評価の規定因とはなっていなかった。次に、影響のプラス面・マイナス面が評価をどう規定するのか検討した。重回帰分析によって、成功・失敗に関わらず、多様なプラス面を見出すことがプラス評価を、多様なマイナス面を見出すことがマイナス評価をうむという量による影響が示された。しかし、数量化 類による分析では、どのようなプラス面・マイナス面を見出すか、という質による影響も見出され、評価の規定の程度は量よりも質の方が強かった。

キーワード：学業達成、成功・失敗経験、目標、原因帰属、現在・未来への影響

1. 問題と目的

学校教育においては、目標に向かって努力することがよしとされ、特に学業面で高い目標を持ち、達成することが奨励される。中学、高校時代は定期テストや受験に多くの時間と労力が割かれるが、その成功や失敗といった経験は、どのようなプロセスを経て、後の人生にどのような影響を与えるのだろうか。

Weinerの達成動機づけ理論 (Weiner, 1979; Weiner, Frieze, Kukla, Reed, Rest, & Rosenbaum, 1971) を始めとする一連の研究では、学業領域の達成に関する研究が積み重ねられ、様々な知見が得られている。Weiner理論では、成功や失敗は、能力や努力などの帰属を媒介して感情や次回への期待を左右し、達成行動を決定するとされるが、この理論の目的は、あるテストに成功もしくは失敗した後、次の同じ分野のテストにどの程度やる気を持って取り組むか、といった同領域における限定的達成行動の予測にある。その他の理論に立脚した研究も、扱うのは1回1回のテストなどであり、結果の解釈やそれが与える影響についても一連の行動の範囲を出ないものが多い。

しかし、重要な領域の成功や失敗であるほど、その経験はより多大な影響を及ぼす。絶望感

理論 (Abramson, 1988; Abramson, Metalsky, & Alloy, 1989) は失敗経験の適応への影響を扱っており、Weiner理論もセルフ・エスティームという非状況変数への影響を認めている (Weiner, 1983)。また、大学生の自己評価の規定因を探った溝上 (2001) は、大学受験の成功や失敗が現在の自己評価を規定する要因の1つであることを見出している。これらは達成経験が自己や適応に影響することを示すものであるが、影響はそれに限らず、人生観・人生の選択等、長期かつ広範囲に及ぶだろう。学校生活という時間・空間共に狭い範囲での達成のメカニズムを解明することも重要であるが、一定の時間が経過した後、達成にむかって努力し成功や失敗を得たかつての経験が、どのように意味づけられ、その後の人生にどう影響するのかの検証も必要である。このような過去の達成経験の影響について明らかにすることで、近年の学校現場における様々な混乱、例えば達成行動の成果であるべき高校・大学での中途退学者の増大や不登校・アパシーなどの問題への示唆も得られるかもしれない。

達成経験の包括的影響を、より長い時間軸から検討した尾崎・上野 (2001) では、成功・失敗経験が現在や未来の多様な領域に影響を及ぼすことが示された。同時に、成功経験がネガティブな影響を、失敗経験がポジティブな影響をもたらす場合があるなど、達成結果と影響の関係が一様でないことも示された。実際、Weiner理論や絶望感理論では、成功や失敗がどのような効果をもたらすかは、帰属などの認知的処理によるとされる。また、学習性無力感理論 (Seligman, 1975) では、成功であっても、非随伴的なもの (努力もせずに成功できたなど) ならば、逆に抑鬱に陥りやすいとされる。すなわち、同じ成功や失敗でも、その経験をどう解釈するかによって、影響は全く異なったものになるのである。したがって、達成経験の長期的影響を検討する際にも、成功・失敗という結果以外のそれをもたらした要因は何であるかに注目する必要があるが、それに関する研究はいまだ行われていない。

本研究の目的は、過去の学業に対する達成経験の長期的影響が、どのような要因によってもたらされたのかを探ることである。達成経験の長期的影響としては、達成経験が現在の自分にプラスの影響をもたらしていると思うか、マイナスの影響をもたらしていると思うか、という現在への影響の評価を用いる。同様に、自分の未来への影響の評価も検討する。その評価をもたらす要因としては、目標をどのような性質のものとして捉えていたかという目標の属性と、成功や失敗といった結果を何によると認知したかという原因帰属の2つを用いる。

目標の属性とは、目標に関していくつかの次元で評定を求めて得る主観的性質であり、「学業」といった目標の客観的分類と併せて考慮されるべきものである (平川 (上野)・尾崎, 2000)。というも、目標の捉え方によって、成功・失敗経験の影響も全く違ったものになる可能性があるからである。例えば、どうしても達成しなければならなかった目標に失敗した場合と、さほどでもなかった目標の失敗では、ダメージの大きさは全く異なるだろう。今回用いる属性は、目標研究 (Cantor & Langston, 1989; Emmons, 1989; Little, 1983) を参考に得た、「自分にとっての重要性」「実現可能性」「努力の必要性」「周囲にとっての重要性」の4つとした。

原因帰属は、限定的な学業達成のみならず、今回のような達成経験の包括的評価においても、重要な媒介変数であると考えられる。さらに、Weiner理論で最も多く研究されてきた部分であ

り、従来の研究結果と比較することで、過去の達成経験を振り返って意味づけるという方法の特殊性もしくは共通性も明らかにできるだろう。どのような帰属因を用いるかについては、研究によって統一が見られず、学業達成で重要な帰属因は能力と努力であることから（北山・高木・松本, 1995; Weiner, 1979）本研究で扱う帰属因は能力と努力のみとした。

目標の属性と原因帰属が達成経験の影響の評価を規定する方向は、以下のように推察できる。達成に成功した場合、自分や他者にとって目標の重要性が高いほど、現在・未来への影響はプラスと評価されるだろう。実現可能性や努力の必要性は、達成に必要な能力・努力の査定と関連するので、能力・努力帰属を高め、その媒介を経て評価を規定することが予想される。成功の能力・努力帰属はいずれもプラス評価をもたらすだろう。一方、失敗時には、自分や周囲に重要な目標であるほど、現在・未来への影響はマイナスに評価されるだろう。実現可能性や努力の必要性は能力不足、努力不足への帰属を高め、それらの帰属はいずれもマイナス評価をもたらすだろう¹⁾。

目標の属性と原因帰属とは別に、達成経験に見出したプラス面・マイナス面が、その経験の評価をどう規定するかも検討する。というのも、目標の属性は達成以前から、帰属は達成直後から、ある程度認知が決定されていると考えられる。もちろん、達成結果やその後の状況によって、後に修正される可能性も高いが、それでも達成前後のものとは全く異質であるとは考えにくい。従来のように限られた時間内での達成プロセスを扱う際には、これらの要因を考慮するだけで十分だったかもしれないが、達成経験の長期的影響を評価する場合、達成から時間が経過している分、目標の属性や帰属のように達成に直接関連した要因以外のものも、大きな影響力を持っている可能性がある。例えば、周囲の期待も非常に高く、受かる見込みのあった大学受験に失敗し、無能感にさいなまれたり、自分の努力不足を責めた場合、短期的にはその経験はマイナス評価されるだろう。だが、その後第2志望の大学で充実した生活を送っているうちに傷が癒え、「今このように充実しているのは、この大学に入ったおかげだ」とさえ思うようになるかもしれない。このように、達成に時間的に後続する、より幅広い要因の影響を考慮する必要があり、さらには、それによって、個々人の状況に応じたより多様な影響評価のプロセスを扱うことができるだろう。そこで、自由記述を用いて経験のプラス面・マイナス面を収集し、単にプラス面のみを見出し、マイナス面を見出さなければ達成経験を総合的にプラス評価するのか、それともどれだけ多種多様なプラス面を見出すかという量が重要なのか、あるいは、どのような性質のプラス面を見出すかという質が重要なのかを探索的に検討する。

なお、過去の達成目標を得るには、方法上の工夫が必要である。従来の達成動機づけ研究のほとんどは、個人が実際に達成を志向しているか考慮せず、調査者が与えた領域について帰属などの評定を求めるという手法を用いてきた。しかし、この方法では、達成の意志が低かったり、達成行動を伴っていない者の混在を避けられない。尋ねれば何らかの回答が得られても、それは、自我関与の高い者に自然発生的に生じ、現実の認知や行動に影響を及ぼす心理プロセスの反映とは明らかに異なるものであろう。今回のように、過去の達成経験の包括的影響を扱う場合は特に、真に達成を志向して行動し、その結果が重大な意味を持つ目標を扱う必要があ

る。したがって、調査者が大学受験など学業領域の目標をあらかじめ指定するのではなく、まずは自我関与の強さがある程度同一となる目標を収集し、それに関する回答を求めなくてはならない。このような場合に有効な方法は自由記述である。被調査者に自由に表出させれば、個人にとって比較的意識度・関心度の高い領域が得られるのである（平川（上野）・尾崎, 2000）, よって、本研究では、領域を指定せずに過去の達成目標を自由記述で得、学業領域の目標を表出した者のみを抽出し、その属性評定や帰属、影響を分析するという方法を用いることにした。

2. 方法

(1) 被調査者と手続き

大阪府、鹿児島県の大学生を対象とした。1999年10月から11月にかけて、心理学関係の授業中に質問紙を配布、回収し、475名（男性127名、女性347名、不明1名）の回答が得られた。平均年齢は19.17歳だった。

(2) 調査内容

より多くの目標を得るため、以下の質問が3回繰り返され、被調査者は目標を最大3つ表出できる。

目標の自由記述と属性評定 「あなたは、過去に何か目指していたこと、目標を持って頑張っていたことがありますか」と過去の目標を自由記述させ、当時その目標をどう捉えていたか、「自分にとっての重要性（とても重要～全く重要でなかった）」「実現可能性（きっと実現できるだろう～きっと実現できないだろう）」「努力の必要性（とても努力しないとイケない～努力しなくてもよい）」「周囲にとっての重要性（とても重要～全く重要でなかった）」への評定を求めた（それぞれ4件法）。

達成と帰属の評定 目標達成に成功したか失敗したかの回答を求め、成功・失敗ごとにその原因を能力と努力に帰属させた。帰属の評定は、100点満点で数値線上に をつける方法を用いた（Figure1）。なお、必ずしも合理的推論を行っているとは限らないので、能力・努力の合計が100点以上でも以下でも構わないと付記した。

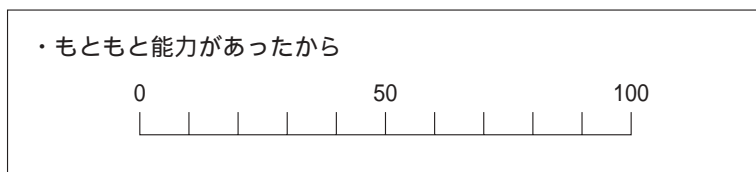


Figure 1 成功の能力帰属を求める質問

達成経験の現在・未来への影響の評定と記述 目標達成に成功もしくは失敗したことが、「現在のあなたに何か影響を与えていますか」と尋ね、影響があるとした者には、それがどのような影響か、プラス面・マイナス面両方について自由記述させた。その上で、それが総合的

に自分にとってプラスの影響かマイナスの影響か、プラス（5点）・どちらかといえばプラス（4点）・どちらともいえない（3点）・どちらかといえばマイナス（2点）・マイナス（1点）の5件法で回答を求めた。同様に、成功もしくは失敗が、「あなたの将来に何か影響を与えますか」と尋ね、未来への影響の有無・プラス面とマイナス面の記述・総合評価を求めた。

3. 結果と考察

(1) 目標と属性の選定

合計860個（1人平均1.81個）の目標が得られた。最も多かったのは、受験や定期テストなど学業領域の目標であった。これは311名（65.5%）が表出しており、次に多かったスポーツ領域の目標を表出した149名（31.4%）とも大きな開きがあった。当質問紙では1人が複数の目標をあげられるが、統計処理の都合上、以降は1人1つの学業領域の目標を取り上げることにした。2つ以上の学業目標をあげていた場合は最初にあげたものを優先させた。最終的に分析に使用した調査対象者は311名（男性84名・女性227名、平均年齢19.13歳）となった。

属性評定の度数分布を検討したところ、自分にとっての重要性（ $M=3.64, SD=.56$ ）を4件法中最も高く評定した者は213名（68.5%）であり、努力の必要性（ $M=3.70, SD=.49$ ）では219名（70.4%）であった。自由記述で得られた真に達成を志向していた目標は、非常に重要性が高く、努力が必要なものであることがわかったが、度数分布の偏りが著しく多変量解析には適さないため、以降の分析に用いる属性は、偏りが少ない実現可能性（ $M=3.23, SD=.71$ ）・周囲にとっての重要性（ $M=3.29, SD=.79$ ）の2つのみとした。

(2) 影響総合評価の検討

達成経験が現在の自分に影響していると回答した者は275名（90.8%）、影響なしとした者は28名（9.2%）であり、未来への影響がある者は255名（85.9%）、ない者は42名（14.1%）であった。ほとんどの者が達成経験から現在や未来に何らかの影響を感じていた。現在への影響総合評価と、未来への影響総合評価の相関係数を算出したところ、成功条件（ $n=218$ ）は $r=.67$ （ $p<.001$ ）、失敗条件（ $n=93$ ）は $r=.60$ （ $p<.001$ ）であった。現在への影響総合評価と未来への影響総合評価との間に関連性はあるものの、中程度の相関にとどまっており、両者は全く同一のものというわけではなかった。したがって、以下、現在への影響と未来への影響をそれぞれ別に分析することに問題はないだろう。

総合評価を「プラス」「どちらかといえばプラス」とした者をプラス群、「どちらかといえばマイナス」「マイナス」をマイナス群とし、「どちらとも言えない」群と共に達成別の度数を算出した。人数の偏りがなければ²検定を行った結果、成功時はいずれも有意な人数の偏りがあったが、失敗時はなかった（Table 1）。目標達成に成功した場合、総合的にプラスの影響を受けたと評価する者が多いが、失敗した場合は、結果に応じてマイナスに意味づける者と、逆にプラスに意味づける者、どちらの判断もしかねる者が同程度いることがわかった。また、成

功時はプラス評価が多いとはいえ、「どちらとも言えない」とする者、マイナスの評価をする者も、現在への影響・未来への影響とも12%程度存在していた。このように、ほとんどが非常に重要な達成目標であるにも関わらず、成功経験はプラス、失敗経験はマイナスという単純な評価がなされず、特に、失敗経験の評価が大きく割れていた。そこで、これらの評価を規定する要因について以下に検討した。

Table 1 影響総合評価度数と²検定結果(%)

| | 現在への影響 | | | | 未来への影響 | | | |
|----|-----------|----------|----------|-------------------|-----------|----------|----------|-------------------|
| | プラス | どちらとも | マイナス | χ^2 (d.f.=2) | プラス | どちらとも | マイナス | χ^2 (d.f.=2) |
| 成功 | 174(85.7) | 24(11.8) | 5(2.5) | 253.31*** | 162(86.2) | 23(12.2) | 3(1.6) | 239.37*** |
| 失敗 | 22(31.0) | 29(40.8) | 20(28.2) | 1.89 | 21(35.9) | 20(31.3) | 23(32.8) | .22 |

***p<.001

(3) 目標の属性・帰属・影響総合評価の関係

達成経験の総合評価に目標の属性と結果の帰属が与える影響を知るため、実現可能性・周囲にとっての重要性・能力帰属得点・努力帰属得点を独立変数とし、現在への影響総合評価・未来への影響総合評価を従属変数とする重回帰分析を行った。なお、目標の属性は帰属に影響を与え、帰属を経由して間接的に総合評価に関係する可能性があるため、実現可能性・周囲にとっての重要性を独立変数、能力帰属得点・努力帰属得点を従属変数とする重回帰分析も行った。Figure 1 に成功条件の、Figure 2 に失敗条件のパスダイアグラムを示し、標準偏回帰係数が有意であった関係をまとめた。

成功条件では、周囲にとっての重要性が高ければ、現在への影響・未来への影響共にプラス評価される予想通りの傾向が示されたが、実現可能性は直接的にも間接的にも総合評価に影響しなかった。さらに、能力帰属からのパスが見られない反面、努力帰属が高いほど現在・未来

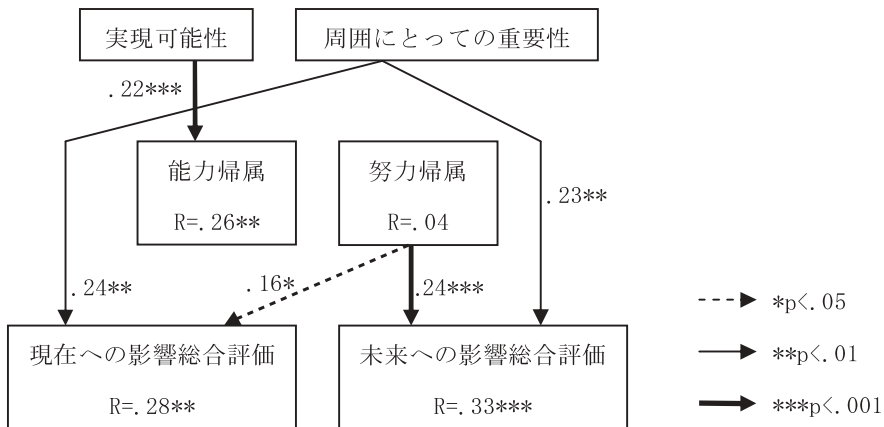


Figure2 成功条件における属性・帰属・総合評価のパスダイアグラム

学業における成功・失敗経験の評価の規定因

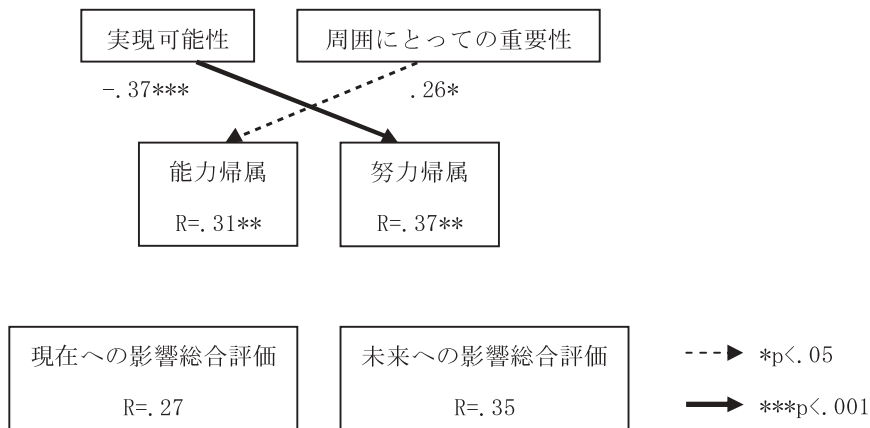


Figure 3 失敗条件における属性・帰属・総合評価のパスダイアグラム

いずれもプラスの影響があると評価されることが示された。従来の知見では、成功の能力帰属は統制感（樋口他, 1983）や誇らしさなどの感情（松尾・小泉, 1991）に影響していたが、より長く広い視点による経験全体の評価となると、「自分の能力があったから成功できた」という判断はあまり意味をなさず、「努力したから成功できた」と感じられるかどうかの方が重要であることが示唆された。一方、失敗条件では属性と帰属間に有意なパスがあっただけで、目標の属性や結果の帰属様式で総合評価を説明することはできなかった。

(4) 影響総合評価とプラス記述・マイナス記述の検討

まず、総合評価と記述の有無との関係を検討した。成功経験の現在への影響総合評価をプラスとしながらも、何らかのマイナス記述を表出した者は174名中115名（66.1%）もいた。反対に、総合評価をマイナスとした5名全員がプラス記述も表出していた。未来への影響でも、総合評価がプラスかつマイナス記述有りは162名中74名（45.7%）、総合評価がマイナスかつプラス記述有りは3名全員だった。失敗経験に目を向けると、現在への影響総合評価がプラスでマイナス記述有りは22名中17名（77.3%）、総合評価がマイナスにも関わらずプラス記述を表出したのも20名中14名（70.0%）と多かった。未来への影響総合評価がプラスかつマイナス記述有りは21名中15名（71.4%）、総合評価がマイナスかつプラス記述有りは23名中13名（56.5%）に達していた。このように、成功・失敗に関わらず、その経験に何らかのマイナス面を見出しでも総合的にプラスと評価したり、逆にプラス面を見出しでもマイナスと評価する者がほとんどであった。

そこで、次は、どれぐらいの種類プラス面・マイナス面を見出すかが総合評価を規定するのか（記述の量と総合評価の関係）、どのような種類のプラス面・マイナス面を見出すかが総合評価を規定するのか（記述の質と総合評価の関係）の2点について探ることにした。

初めに、現在・未来への影響のプラス記述・マイナス記述それぞれを分類し、尾崎・上野（2001）にあるカテゴリーを設定した。カテゴリーは心理学専攻の大学院生および教員の3

名で行い、協議後の一致率は、現在に対するプラス記述で91.1%、マイナス記述で88.6%、未来に対するプラス記述で93.6%、マイナス記述で94.1%であった。カテゴリーの出現率をTable 2に示した²⁾。

Table 2 影響記述のカテゴリーと度数（最も度数の多い下位カテゴリー）

| | | 現在への影響 | |
|------------|----------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|
| | | 成功条件 201名中(%) | 失敗条件 71名中(%) |
| プラスのカテゴリー | 現在の環境 | 75(37.3) (現在の生活環境がよい) | 22(31.0) (現在の生活環境がよい) |
| | 人との関わり | 45(22.4) (人とのよい出会いがあった) | 18(25.4) (人とのよい出会いがあった) |
| | 内面の変化 | 129(64.2) (自信がついた) | 30(42.3) (性格・考え方がよい方に変わった) |
| | 将来・目標 | 26(12.9) (将来の夢に近づけた) | 9(12.7) (新しい目標・興味あることを見つけた) |
| マイナスのカテゴリー | 現在の環境 | 23(11.4) (現在の生活環境がよくない) | 10(14.1) (現在の生活環境がよくない) |
| | 人との関わり | 12(6.0) (周囲の人との関係にネガティブな影響があった) | 4(5.6) (周囲の人との関係にネガティブな影響があった) |
| | 内面の変化 | 74(36.8) (性格・考え方が悪い方に変わった) | 27(38.0) (やる気・努力しようという意欲がなくなった) |
| | 将来・目標 | 6(3.0) (目標を見失った) | 9(12.7) (将来への不安がある) |
| | 過去へのこだわり | 28(13.9) (目標達成のために犠牲にしたものがある) | 26(36.6) (やり残した事・やり残った事への未練がある) |
| | | 未来への影響 | |
| | | 成功条件 188名中(%) | 失敗条件 63名中(%) |
| プラスのカテゴリー | 現在の環境 | 16(8.5) (現在のよい環境が得られた) | 2(3.2) (現在のよい環境が得られた) |
| | 人との関わり | 17(9.0) (人とのよい出会いがあった) | 5(7.9) (周囲の人への態度や気持ちが良い方に変わった) |
| | 内面の変化 | 74(39.4) (自信がついた) | 17(27.0) (忍耐・努力する力がついた) |
| | 将来の進路 | 103(54.8) (将来の夢に近づけた) | 23(36.5) (将来の選択の幅が広がった) |
| | 将来の生活 | 10(5.3) (これから新たなことが学べる・経験できる) | 4(6.3) (将来楽しい生活ができる) |
| マイナスのカテゴリー | 現在の環境 | 10(5.3) (現在の環境に不満がある) | 6(9.5) (現在の環境に不満がある) |
| | 人との関わり | 4(2.1) (周囲の人からネガティブな評価を受ける) | 3(4.8) (周囲の人からネガティブな評価を受ける) |
| | 内面の変化 | 23(12.2) (性格・考え方が悪い方に変わった) | 9(14.3) (やる気・努力しようという意欲がなくなった) |
| | 将来の進路 | 16(8.5) (将来に不安がある) | 21(33.3) (将来に不安がある) |
| | 将来の自分への不安 | 22(11.7) (自分の未熟さに対する不安がある) | 5(7.9) (新たな目標の達成に不安がある) |
| 過去へのこだわり | 16(8.5) (他の可能性や生き方があったかもしれない) | 11(17.5) (やり残した事・やり残った事への未練がある) | |

(5) 影響の記述量・質が総合評価に与える影響

それぞれのカテゴリーに属する記述があれば1点、なければ0点とした。合計は表出したカテゴリー数に相当し、多いほど多様な種類のプラス面・マイナス面を見出したことを示す。表出したカテゴリーの数によって総合評価がどの程度左右されるのかを検討するため、成功・失敗条件ごとに、現在への影響のプラスのカテゴリー数とマイナスのカテゴリー数を独立変数、現在への影響総合評価を従属変数とする重回帰分析を行った。結果、いずれの条件においても標準偏回帰係数が有意となり、未来への影響総合評価についての重回帰分析でも同様の結果が得られた (Table 3)。以上のことから、達成に成功しても失敗しても、多様なプラス面を見出すほど、また見出したマイナス面が少ないほど、現在や未来にプラスの影響があると評価し、逆に様々なマイナス面を見出すほど、また見出すプラス面が少ないほど、現在や未来にマイナスの影響があると評価する傾向が明らかとなった。

Table 3 影響総合評価に対するカテゴリー数の重回帰分析結果

| | | 標準偏回帰係数 | | R |
|------|------------|------------|-------------|---------|
| | | プラスのカテゴリー数 | マイナスのカテゴリー数 | |
| 成功条件 | 現在への影響総合評価 | .27 *** | -.41 *** | .46 *** |
| | 未来への影響総合評価 | .14 * | -.38 *** | .40 *** |
| 失敗条件 | 現在への影響総合評価 | .34 ** | -.38 *** | .54 *** |
| | 未来への影響総合評価 | .52 *** | -.43 *** | .67 *** |

*p<.05、**p<.01、***p<.001

次に、表出したカテゴリーの種類によって総合評価がどの程度左右されるのかを検討した。成功・失敗条件、現在への影響・未来への影響別に、カテゴリーそれぞれの有無を独立変数、総合評価を従属変数とする数量化 類による分析を行った。結果をTable 4 に示した。

成功条件・現在への影響のプラスのカテゴリーでは、偏相関係数の値はいずれもさほど大きくないが、順に「内面の変化 (.22)」「人との関わり (.20)」が影響していた。マイナスのカテゴリーでは「内面の変化 (.41)」「将来・目標 (.34)」の影響が目立っていた。成功条件・未来への影響では、プラスのカテゴリーに特に強い影響を持つものはなく、マイナスのカテゴリーで「将来の自分への不安 (.29)」「過去へのこだわり (.27)」の影響が見られ、それに「内面の変化 (.21)」「将来の進路 (.20)」が続いていた。よって、達成に成功し、自分に自信が持てたり、人との良い出会いに恵まれた場合、経験をプラスに評価するが、成功できたからこそ考えの幅が狭まったり、目標を見失った場合には、その経験をマイナス評価することがわかった。また、成功はしても、挫折を知らない未熟な自分の将来に不安を抱いたり、他の生き方や可能性もあったのではないかと思った場合、未来への影響をマイナスに評価する傾向が示された。

一方、失敗条件の現在への影響では、プラスのカテゴリーは、影響の強い順に「将来・目標 (.34)」「人との関わり (.33)」「内面の変化 (.22)」が、マイナスのカテゴリーは「内面の変化 (.43)」「現在の環境 (.40)」「過去へのこだわり (.37)」が関係していた。学業に失敗しても、

Table 4 影響総合評価に対するカテゴリーの数量化 類分析結果

| | | 現在への影響 | | | | | | |
|------------|--------|--------|---------|-----|-------|---------|------|-------|
| アイテム | カテゴリー | | 成功条件 | | | 失敗条件 | | |
| | | | カテゴリー数量 | 範囲 | 偏相関係数 | カテゴリー数量 | 範囲 | 偏相関係数 |
| プラスのカテゴリー | 現在の環境 | 無 | -0.10 | .26 | .16 | -0.02 | .06 | .02 |
| | | 有 | .17 | | | .04 | | |
| | 人との関わり | 無 | -0.08 | .34 | .20 | -0.18 | .70 | .33 |
| | | 有 | .27 | | | .53 | | |
| | 内面の変化 | 無 | -0.24 | .37 | .22 | -0.23 | .53 | .22 |
| | | 有 | .13 | | | .31 | | |
| 将来・目標 | 無 | -0.04 | .34 | .16 | -0.14 | 1.10 | .34 | |
| | 有 | .30 | | | .96 | | | |
| マイナスのカテゴリー | 現在の環境 | 無 | .06 | .48 | .20 | .18 | 1.30 | .40 |
| | | 有 | -.43 | | | -1.12 | | |
| | 人との関わり | 無 | .01 | .21 | .07 | -0.01 | .18 | .05 |
| | | 有 | -.20 | | | .17 | | |
| | 内面の変化 | 無 | .25 | .69 | .41 | .39 | 1.01 | .43 |
| | | 有 | -.44 | | | -.63 | | |
| 将来・目標 | 無 | .04 | 1.47 | .34 | .03 | .20 | .07 | |
| | 有 | -1.43 | | | -.18 | | | |
| 過去へのこだわり | 無 | .04 | .32 | .15 | .35 | .95 | .37 | |
| | 有 | -.28 | | | -.60 | | | |
| | | | R | | .53 | R | | .64 |
| | | 未来への影響 | | | | | | |
| アイテム | カテゴリー | | 成功条件 | | | 失敗条件 | | |
| | | | カテゴリー数量 | 範囲 | 偏相関係数 | カテゴリー数量 | 範囲 | 偏相関係数 |
| プラスのカテゴリー | 現在の環境 | 無 | -0.02 | .28 | .10 | -0.02 | 1.13 | .19 |
| | | 有 | .25 | | | 1.11 | | |
| | 人との関わり | 無 | -0.02 | .24 | .10 | -0.08 | 1.06 | .36 |
| | | 有 | .22 | | | .98 | | |
| | 内面の変化 | 無 | -0.02 | .06 | .03 | -.45 | 1.29 | .60 |
| | | 有 | .03 | | | .84 | | |
| 将来の進路 | 無 | -0.16 | .29 | .15 | -0.29 | 1.03 | .50 | |
| | 有 | .13 | | | .74 | | | |
| 将来の生活 | 無 | -0.00 | .04 | .01 | -0.01 | .19 | .06 | |
| | 有 | .03 | | | .17 | | | |
| マイナスのカテゴリー | 現在の環境 | 無 | .02 | .43 | .13 | .09 | .99 | .35 |
| | | 有 | -.41 | | | -.89 | | |
| | 人との関わり | 無 | .02 | .77 | .15 | .01 | .24 | .07 |
| | | 有 | -.75 | | | -.23 | | |
| | 内面の変化 | 無 | .06 | .48 | .21 | .05 | .36 | .15 |
| | | 有 | -.42 | | | -.31 | | |
| 将来の進路 | 無 | .04 | .52 | .20 | .35 | 1.04 | .49 | |
| | 有 | -.47 | | | -.69 | | | |
| 将来の自分への不安 | 無 | .08 | .68 | .29 | .12 | 1.54 | .46 | |
| | 有 | -.60 | | | -1.42 | | | |
| 過去へのこだわり | 無 | .06 | .73 | .27 | .23 | 1.33 | .54 | |
| | 有 | -.67 | | | -1.10 | | | |
| | | | R | | .43 | R | | .76 |

新しい将来や目標を見出せたり、よい人間関係を築ききっかけになったり、自分の内面が磨かれたりすれば、経験をプラスに意味づけられることがわかった。反対に、やる気や自信を失ったり、その結果得た現在の生活環境が本意なものであったり、やり残した事への未練があれば、総合的にマイナスの影響を受けることが示唆された。失敗条件・未来への影響では、プラスのカテゴリーは順に「内面の変化 (.60)」「将来の進路 (.50)」「人との関わり (.36)」、マイナスのカテゴリーは「過去へのこだわり (.54)」「将来の進路 (.49)」「将来の自分への不安 (.46)」「現在の環境 (.35)」の影響が強かった。現在への影響と同様の結果に加え、学業での失敗で将来の進路や新たな目標の達成に不安を感じた時、将来にマイナスの影響があると評価すると言えよう。

以上の結果が示すように、カテゴリーの量・質共に総合評価に影響を与えていた。なお、カテゴリー量と総合評価の分析における自由度を調整した R^2 は、成功条件で現在への影響が.20、未来への影響が.15であり、失敗条件で現在への影響が.28、未来への影響が.42であった。一方、カテゴリーの質と総合評価の分析の自由度を調整した R^2 は、成功条件で現在への影響が.25、未来への影響が.14であり、失敗条件で現在への影響が.32、未来への影響が.49であった。このように、成功条件の未来への影響を除き、いずれもカテゴリーの質による総合評価の説明率の方が、カテゴリーの量による説明率よりもわずかながら高かった。よって、多様なプラス面もしくはマイナス面を見出すか、あるいは少ししか見出さないか、も重要であるが、どのようなプラス面・マイナス面を見出すかの方が、その経験の総合評価を説明するのにやや有効であった。

4. 総合的考察

本研究では、学業達成経験が現在や未来にもたらす影響の規定因を検討した。学業の成功経験については、ほとんどの者がプラスの影響があると評価していたが、失敗経験の評価は様でなく、プラスの評価、マイナスの評価、どちらとも言い難い評価に等分されていた。その評価をもたらした要因を検討したところ、成功した場合には、周囲にとって重要な目標であったという認知や、努力したから成功できたという認知が評価を高めていた。また、その経験にどれだけ多様なプラス面・マイナス面を見出すかという量と、どのような内容のプラス面・マイナス面を見出すかという質も総合的評価に影響していた。学業達成に失敗した場合、その目標の属性や、結果を何に帰属したかは評価を規定せず、見出すプラス面・マイナス面の量と質に大きく左右されていた。ただし、量よりもその内容の方が、経験の評価をより強く規定しており、規定の程度は成功時よりも失敗時の方がいずれも強かった。

今回のように重要性の高い目標達成の失敗経験は、後々にまで深刻なダメージを与えるとは一般には考えられうるが、実際にはそうでもないことが示された。その経験をマイナス評価しないのも、周囲に重要視されていない目標にすぎないから、とか、自分の無能力や努力不足のせいではないから、といった、結果を得る前後から行われているであろう認知の取り方によるのではなかった。その後の生活の中で起こる様々な内的・外的事態を、どう解釈するかによるの

である。

さらに、その事態は、達成に直接関連したものとは限らず、失敗経験から偶然派生したものも含んでいた。例えば、現在・未来にわたって将来の目標や進路に関するプラス面（カテゴリー名「将来・目標（現在への影響）」「将来の進路（未来への影響）」）を見出すことは、学業の失敗経験の評価を高めていた。調査データから1例をあげると、大学1年生の19歳の女性は、希望の学部の受験に失敗し、看護を専攻とすることとなったが、それが現在・未来に「どちらかといえばプラス」の影響を及ぼすと評定し、「看護として、医療にたずさわることができる（現在への影響）」「看護の方にいったけれど、とてもやりがいがあると感じた（未来への影響）」というプラス面を表出している。彼女は、本来第一志望ではなかった看護の仕事に就くことに今や積極的関与を示しているが、これは失敗経験そのものの評価（すなわち、成功していれば得られたであろう将来の否定）ではなく、失敗で偶然得た結果への評価である。「人との関わり」に属するプラス面も現在・未来への影響の評価を高める傾向にあったが、これも同様に、例えば不本位な大学ながらもそこで良き友人に恵まれたことを評価するものであって、志望大学に入学がかなわなかったことを評価しているのではない。志望大学でも素晴らしい友人と出会えたかもしれない、失敗当初は親友を得ることを意図して今の大学に入学したわけではないだろう。このように、過去の達成経験、特に失敗経験の評価は、達成以前や直後と関連の深い領域とは異なったものからの影響が大きいと言える。

これらは、達成の短期的メカニズムに偏向し、それ故成功は良く失敗は悪いという単純な見方を前提としたり、短期的効果を目指した方略を重視してきた従来の姿勢に再考を促すものである。本研究は、学業達成経験の長期的影響という、これまで重視されてこなかった領域に注目し、それにはどのような要因がどれだけ関わっているのかを具体的に明らかにした。それにより、達成のメカニズムをより包括的視点から扱う必要性と、そのためには、従来の短期的影響を扱う際用いてきた要因では不十分であり、その経験以後の事態の認知という新たな視点が重要であることが示された。

注意すべきことは、達成経験の評価は、常に一定のものではなく、変動していると考えられることである。大学受験に失敗した当初、大変なショックを受け、結果に応じた意味づけしかできなかったとしても、時が経ち改めて振り返ると、その経験は現在までの状況を反映したより豊富な意味を持って立ち上がってくるのではないだろうか。今回は、成功・失敗がどのくらい過去の経験なのかを問わず一律に扱った。しかし、時間の経過を考慮することによって、過去の経験であるほど、成功の代償に目を向けマイナス評価しやすいのか、失敗の痛手から立ち直りプラス評価しやすいのかなど、達成経験と影響の関係をより詳しく検討することができよう。時間の経過にしたがってどんな影響を見出してゆくのか、影響の強さや評価はどう変化してゆくのか、というプロセスの検討は今後の課題である。さらに、達成行動の取り方など、達成時のプロセスによる違いや、結果を得た後の対処行動やソーシャル・サポートなどの具体的状況についても詳しい検討が求められる。

学業達成経験の評価を規定するプラス面・マイナス面をより把握しやすくするため、さらに

抽象的上位次元への集約を試みた。Table 2 に示した記述カテゴリーを俯瞰すると、いずれのカテゴリーも、過去・現在・未来という時間軸と、環境・自己・他者という位置づけの2点から分類可能であった。そこで、現在への影響・未来への影響、プラス・マイナスの区別なく、全てのカテゴリーをこの3(過去・現在・未来) × 3(環境・自己・他者)の2軸上にまとめ直した。「現在の環境(現在への影響プラス・現在への影響マイナス・未来への影響プラス・未来への影響マイナス)」は「現在・環境」、「人との関わり(現在への影響プラス・現在への影響マイナス・未来への影響プラス・未来への影響マイナス)」は「現在・他者」、「内面の変化(現在への影響プラス・現在への影響マイナス・未来への影響プラス・未来への影響マイナス)」は「現在・自己」、「将来・目標(現在への影響プラス・現在への影響マイナス)」、「将来の進路(未来への影響プラス・未来への影響マイナス)」、「将来の生活(未来への影響プラス)」は「未来・環境」、「将来の自分への不安(未来への影響マイナス)」は「未来・自己」、「過去へのこだわり(現在への影響マイナス・未来への影響マイナス)」は「過去・自己」に分類された。そのうち、数量化 類による分析で、評価への影響が顕著だったもののみ取り出し、包括的な命名を行ったのが、Table 5 である。

こうしてみると、成功条件で特にプラスの規定因の働きが弱いものの、成功・失敗条件間に規定因の差はないことがわかる。つまり、学業達成に成功しようと、失敗しようと、Table 5 に示したプラス面・マイナス面を見出すかどうかで、その経験の評価が決定される傾向があるということになる。また、プラスの規定因は比較的少ないのに対し、達成経験をマイナスに意味づけさせる要因は多く、過去・現在・未来の多岐にわたっている。否定性次元が肯定性次元よりも複雑な構造であることは、大学生の学業的文脈が自己評価に与える影響を検討した溝上(2001)でも示されている。プラスの評価を行う場合、その理由は単純かつ少数で構わないが、マイナスの評価を行う者は、かなり複雑で多様性をはらんだ心理状態にあるようである。さらに、他者との関係性はプラスの評価のみを規定し、マイナス評価の規定因にならなかった。自己評価の規定因を検討した研究では、人との関係性は高い自己評価のみを規定し、否定的自己評価の規定因とはなっていない(溝上, 2002)。他者との良い関係はプラス評価をもたらすが、他者との関係に恵まれなくともマイナス評価とはならないことが、ここでも示されているのである。自己であれ達成経験であれ、ものごとの評価を行う際、マイナス評価の要因はプラスのそれより複雑で、他者との関係性はプラス評価にのみ関わるという共通点があるのは、興味深い結果である。今後、どのような次元のどのような要因が重要か、あるいは重要でないのかを

Table 5 達成経験の評価の規定因

| | プラスの規定因 | | | マイナスの規定因 | | |
|----|---------------------|----|----|-------------------|----------|----|
| | 環境 | 自己 | 他者 | 環境 | 自己 | 他者 |
| 過去 | | | | 過去の在り方 | | |
| 現在 | (現在の自己の内面)(他者との関係性) | | | (現在の環境) | 現在の自己の内面 | |
| 未来 | (将来の進路・目標) | | | 将来の進路・目標 将来の自己の内面 | | |

カッコ内は、成功条件の規定因としてはさほど強くない。

比較検討することで、評価の対象の特質や、評価を行う際の人間の心的プロセスの一端を明らかにできるかもしれない。

本研究では、達成を志向していた目標がどのようなものだったか、自分にとっての重要性・実現可能性・努力の必要性・周囲にとっての重要性という属性で捉えた。しかし、実現可能性は本質として能力・努力帰属との関連が強く、分析に用いなかった努力の必要性も、そもそも努力帰属を含んだ属性である。今後は、帰属の性質を内包しない目標の性質も考慮する必要があるだろう。例えば、Eccles & Wigfield (1995)などは、主観的な課題の価値として、重要性 (importance) ・有用性 (utility) ・興味 (interest) を検討している。また、自己査定理論 (Trope, 1975) やセルフ・ハンディキャッピング (Jones & Berglas, 1978) などの課題選択に関する研究は、能力の診断性という基準によってどのような課題を選択するか決定されることを示している。これは、課題選択の動機が結果の解釈と強く結び付いている、つまり、動機によって結果の解釈があらかじめ定められている可能性を表していると考えられる。何故その目標を達成しようと思ったのか、という動機を探ることも重要だろう。さらに、その目標達成が、社会的に、あるいは周囲の人々にどのような意義を持つのか、結果の他者比較が容易か、など、目標をめぐる周囲との関係も結果の解釈に影響する可能性が高い。

達成経験相互の影響も無視できない。成功経験がさらなる成功を、失敗経験がさらなる失敗を生むこともあるだろう。反対に、失敗があったからこそ次に大きな成功を収めることもあるだろう。今後は、重要な成功経験と失敗経験それぞれの影響について、個人内で比較検討したり、その相互作用や順序性を考慮した研究を行う必要があるだろう。

今回は、過去の達成目標をふりかえり、その影響の評価を行う、という方法を用いた。そこでは、目標 達成行動 結果 帰属 影響の評価、という流れが想定されているが、現在から過去をさかのぼるという視点をとる限り、この順番は仮定のものにすぎず、その他の要因や流れに影響されている可能性もある。時系列に配慮した縦断的研究も用いなければ、この問題は解決されない。同じような問題として、現在の適応状態と過去の意味づけの因果関係を考慮する必要がある。適応的なパーソナリティーの持ち主ほど不快エピソードの認識がポジティブであるという指摘もあるように (神谷・伊藤, 2000)、現在の適応状態が良ければ、達成経験に様々なプラス面を見出してプラスの評価を与え、不適応ならば、その逆の評価を行うなど、適応という指標である程度達成経験の影響や評価を説明できる可能性が考えられるからである。しかし、有益性発見によって適応状態やオプティミズムの素質的変化がもたらされるように (Davis, Nolen-Hoeksema, & Larson, 1998)、失敗を糧にできた結果適応的になったと考えることもできる。適応的人格特性や認知が出来事の評価を生むのか、それとも出来事の受け止め方の変化が適応的状态への変化を生むのか、という因果関係は不明な点が多く、その交互作用も無視できない。慎重かつ長期的視点からの検証が待たれる。

あとがき

本研究は、上野・尾崎が共同で調査・分析を行い、上野が執筆した。

注

- 1) そもそも努力不足への帰属は達成行動を高めるとされるが (Weiner, 1979; Weiner et al., 1971) 日本では、統制感と関連せず (樋口・鎌原・大塚, 1983) 絶望感とさえ結び付くという報告もあり (桜井, 1989) 能力不足ほどではなくても適応的とは言えないと考えるのが妥当だろう。
- 2) 尾崎・上野 (2001) では、カテゴリーを上位・下位の2次元に設定したが、本研究で用いるのは上位にあたるカテゴリーのみである。下位カテゴリーの詳しい内容・度数とその検討については、尾崎・上野 (2001) を参照されたい。

引用文献

- Abramson, L.Y. 1988 *Social cognition and clinical psychology*. New York: Guilford Press.
- Abramson, L.Y., Metalsky, G.I., & Alloy, L.B. 1989 Hopelessness depression: A theory-based subtype of depression. *Psychological Review*, 96, 358-372
- Cantor, N., & Langston, C.A. 1989 Ups and downs of life tasks in a life transition. In L.A. Pervin (Ed.), *Goal concepts in personality and social psychology*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum., 127-167
- Davis, C.G., Nolen-Hoeksema, S., & Larson, J. 1998 Making sense of loss and benefiting from the experience: Two construals of meaning. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 561-57
- Eccles, J.S., & Wigfield, A. 1995 In the mind of actor: The structure of adolescents' achievement task values and expectancy-related beliefs. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 215-225
- Emmons, R.A. 1989 The personal striving approach to personality. In L.A. Pervin (Ed.), *Goal concepts in personality and social psychology*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum., 87-126
- 樋口一辰・鎌原雅彦・大塚雄作 1983 児童の学業達成に関する原因帰属モデルの検討 教育心理学研究, 31, 18-27
- 平川(上野)淳子・尾崎仁美 2000 達成動機研究における方法論の検討と課題 大阪大学教育学年報, 5, 85-98
- Jones, E.E., & Berglas, S. 1978 Control of attributions about the self through self-handicapping strategies: The appeal of alcohol and the role of underachievement. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 4, 200-206
- 神谷俊次・伊藤美奈子 2000 自伝的記憶のパーソナリティ特性による分析 心理学研究, 71, 96-104
- 北山 忍・高木浩人・松本寿弥 1995 成功と失敗の帰因 日本人の自己の文化心理学 心理学評論, 38, 247-280
- Little, B.R. 1983 Personal projects: A rationale and method for investigation. *Environment and Behavior*, 15, 273-309
- 松尾 馨・小泉令三 1991 中学1年生の英語学習における自己の能力評定、原因帰属、感情、学業成績の関係 福岡教育大学紀要, 40, 269-279
- 溝上慎一 2001 大学生の自己評価の世界を意味づける学業的文脈 溝上慎一編 大学生の自己と生き方 大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学 ナカニシヤ出版, 97-137
- 溝上慎一 2002 自己評価の規定要因と人との関係性 自己評価の高低における関係性の構造の違い 梶田叡一編 自己意識研究の現在 ナカニシヤ出版, 153-170

- 尾崎仁美・上野淳子 2001 過去の成功・失敗経験が現在や未来に及ぼす影響 成功・失敗経験の多様な意味 大阪大学人間科学部紀要, 27, 65-87
- 桜井茂男 1989 児童の絶望感と原因帰属との関係 心理学研究, 60, 304-311
- Seligman, M.E.P. 1975 *Helplessness: On depression, development, and death*. San Francisco: W.H. Freeman.
- Trope, Y. 1975 Seeking information about one's own ability as a determinant of choice among tasks. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 1004-1013
- Weiner, B. 1979 A theory of motivation for some classroom experiences. *Journal of Educational Psychology*, 71, 3-25
- Weiner, B. 1983 Some methodological pitfalls in attributional research. *Journal of Educational Psychology*, 75, 530-543
- Weiner, B., Frieze, I., Kukla, A., Reed, L., Rest, S., & Rosenbaum, R.M. 1971 Perceiving the causes of success and failure. In E.E. Jones, D.E. Kanouse, H.H. Kelley, R.E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner (Eds.), *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. New Jersey: General Learning Press., 95-120

Regulating Factors of Evaluations of Successful or Unsuccessful Experiences in Academic Field

Junko UENO and Hitomi OZAKI

Abstract: The past achievement experiences of 475 university students were collected using an open-ended questionnaire, and 311 participants who mentioned their goals in academic fields were selected for analysis. Analysis of how the participants evaluated the impact of experiences on present and future life showed that most successful experiences were evaluated positively but some were not. The evaluations of unsuccessful experiences were divided equally into three types ; positive, negative, and neither. Pass analysis indicated that attributes of the goals and causal attributions could be the regulating factors of evaluations only in successful situations. Another regulating factor, detailed advantages and disadvantages of the experiences, were also examined. Multiple regression analysis showed that regardless of success or failure, those who found various advantages tend to make positive evaluations, and those who found various disadvantages tend to make negative evaluations. However, further analysis with *Hayashi's Quantification Method* suggested that advantages/disadvantages themselves were more influential factors of evaluations.

Key words : achievement in academic field, successful/unsuccessful experiences, goals, causal attribution, the impact on present/future life